

Title	連語論的アプローチによる無生物主語他動詞文の日中対照 : 対格名詞が人名詞である場合
Author(s)	麻, 子軒
Citation	阪大日本語研究. 2018, 30, p. 71-92
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70099
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

連語論的アプローチによる無生物主語他動詞文の日中対照 —対格名詞が人名詞である場合—

A contrastive study of Japanese and Chinese in transitive sentences with inanimate subjects by using theory of collocation:
When the accusative case noun is a human noun

麻子軒
MA Tzu-Hsuan

キーワード：無生物主語他動詞文、連語論的アプローチ、コレスポネンス分析、日中対照、内面性、具体性

要旨

本稿では、日中両言語における（「歳月が私を変えた／歲月改變了我」のような）無生物主語他動詞文について、それぞれの成立要因とその異同を、連語論的アプローチという理論およびコレスポネンス分析という統計手法により分析し、以下の3点を明らかにした。

- ① 対格名詞を「人名詞」に限定した場合、無生物主語他動詞文の成立において、日本語では動詞の「内面性」、日中両言語では動詞の「具体性」が共通の要因として働いており、また、各タイプの名詞もその性質によって、それと結びつきやすい動詞の種類が決まっている。
- ② 日中の共通点として、「具体物」タイプの名詞は「ベッドが私を呼ぶ」のように、比較的具体的かつ外面的な属性をもつ「空間変化」の動詞による結びつきに集中していることが挙げられる。
- ③ 日中の最も大きな相違点として、日本語では「人間活動」の名詞を主格名詞とし、「心理変化」だけでなくほかの動詞をも述語とするのに対し、中国語では「抽象的關係」の名詞を主格名詞とし、主に「心理変化」を述語とすることが挙げられる。

1. はじめに

本稿は、日本語と中国語における無生物主語他動詞文を比較し、それぞれの成立要因とその異同を明らかにすることを目的とする。無生物主語他動詞文とは、以下の(1)～(6)に挙げられるような、無生物名詞が主語となる他動詞文のことである。

- (1) 砂塵が空を覆った。(中津文彦『塙保己一推理帖』)
- (2) 沙塵覆蓋了天空。(筆者訳)
- (3) ? 鍵がドアを開けた。(熊2009: 162)
- (4) 鑰匙打開了門。(筆者訳)

- (5) 風が音を立てた。(山崎玲子『もうひとつのピアノ』)
 (6) ? 風發出了聲音。(筆者訳)

同じ無生物主語他動詞文であっても、(1) (2) のように、日本語と中国語が両方成立するパターンと、(3) (4)・(5) (6) のように、一方のみが成立するパターンとがある。このように、日中における無生物主語他動詞文の成立メカニズムは、それぞれ異なるものと考えられる。この問題について、これまでの先行研究では名詞（主語と目的語）のみに注目するアプローチと動詞（述語）のみに注目するアプローチが採られてきた。それに対して、筆者は名詞と動詞とを同時に扱う連語論的アプローチを採用し、対格名詞をそれぞれ物名詞、事名詞、人名詞という3つの場合に分けて、両言語の無生物主語他動詞文の異同を量的に明らかにすることを試みてきた。このうち、対格名詞が物名詞と事名詞の場合については麻（2016、2017）で論じており、本稿では対格名詞が人名詞である場合に焦点を当てて分析を行う。

2. 先行研究

無生物主語他動詞文の成立に関する体系的な考察には、角田（1991）と熊（2009）がある。角田（1991）は、Silverstein（1976）が提案した「名詞句階層」を用いて、無生物主語他動詞文の成立を説明した。名詞句階層とは、名詞を「活動性」の度合いによって分類する概念である。角田は、活動性が高い名詞が主語になりやすいことから、無生物名詞が主語であっても、目的語となる名詞に対して名詞句階層が上位にあれば文が成り立つとした。ところが、日本語の無生物主語他動詞文には、(7) (8) のように名詞句階層では説明できないものがある。

- (7) 絶望が俊也を襲った。(二条睦『監獄女医』)
 (8) ? 台風が窓ガラスを割った。(熊2009: 94)

これに対し、熊（2009）は「他動性」という異なる観点を取り入れてこの問題を説明しようとする。熊は、無生物主語他動詞文を「所属関係の文」と「非所属関係の文」とに分ける。前者は、(9) のように、主語と目的語が同一の実体である文であり、後者は、(10) のような一般的な「能動的な文」と、(11) のように述語が語彙的な受身動詞の「受動的な文」とに分けられる。

- (9) 懐かしい建物が姿を消した。(熊2009: 113)

(10) 強烈な陽がしだれ桜を照らしている。(熊2009:140)

(11) しだれ桜が強烈な陽を受けている。(熊2009:140)

熊は以上の3種類の構文に対して、受動的な文と所属関係の文は文構造上他動詞文の形であるが、実際には述語の他動性が低いため、活動性をそれほど強くもたない無生物名詞でも主語に立つことができ、無生物主語他動詞文として成立しやすくと主張した。ただし、述語の他動性が高い「能動的な文」に関しては、なぜそれが無生物主語他動詞文として成立するのかについて説明できず、他動性をもって無生物主語他動詞文の成立に対して一貫性のある説明を与えることができなかった。

角田と熊は名詞句階層と他動性という説明原理を提出した点において、無生物主語他動詞文成立の研究に大きな貢献をなしたが、文の一部である名詞か動詞かの一方しか見ないところに問題があるものと思われる。無生物主語他動詞文の成立は単に名詞か動詞か一方だけの問題ではなく、両者が互いに影響し合うものだと考えられるからである。

この問題点を解決しようとして、筆者は、連語論的アプローチという理論とコレスポンデンス分析という統計手法を取り入れ、主格名詞と動詞との結合傾向を考察した(麻2016、2017)。その結果、対格名詞が物名詞である場合には動詞の「再帰性」と「受影性」、対格名詞が事名詞である場合には動詞の「再帰性」が重要な成立要因として働いていることと、各タイプの主格名詞と結びつきやすい動詞はその名詞の性質と深く関わっていることが明らかにされ、先行研究のように名詞と動詞を別々に扱っては見出しえない知見が得られた。これに加えて、筆者が導入した連語論的アプローチには、名詞と動詞を同時に扱うメリットのほかに、日中両言語を同じ枠組みのなかで論じ得るという利点もある。

本稿では、これまでの対格名詞が物名詞・事名詞の場合の分析に続くものとして、対格名詞が人名詞である場合に焦点を当て、日中両言語における無生物主語他動詞文の成立要因とその異同を明らかにしたい¹⁾。

3. 用語の規定

本節では、本稿のなかで特に重要な「無生物」「主語」「他動詞」の3つの用語の規定について簡潔に述べる。詳細は麻(2016、2017)に詳しい。

「無生物」²⁾とは人または動物でないものを指し示すもので、「有生物」の反対の概念である。本稿では、『分類語彙表』(国立国語研究所2004)を利用し、分類項目が「抽象的關係」「人間活動—精神及び行為」「生産物及び用具」「自然物及び自然現象」に属するものを「無生物」と

見なす。ただし、「自然物及び自然現象」の下位分類にある「生物」「動物」は「有生物」に属する。中国語に関しても日本語と同じ基準で規定を行う。

「主語」に関して、角田（1991）の定義によると、それは文法機能レベルに属するものであるが、5.1節で述べるように、連語論的アプローチは主語・目的語のような文法機能レベルのものを論じる理論ではないため、本稿ではその代わりに主格名詞・対格名詞といった格レベルの用語を用いる。厳密には主語と主格名詞が指すものが全同でない場合もあるが、本稿で対象にする他動詞文の主語は主格で示されたものに限定されるため、両者は実質上同じものを指すことになる。中国語の場合も基本的には日本語の規定に従う。

「他動詞」に対する規定は、奥津（1967）に従い、原則として「ヲ格」をとる動詞とする。「走る」「通る」のような移動動詞や、「出る」「離れる」のような離脱動詞がとる「ヲ格」は「目的格」ではないため、これらは他動詞ではなく自動詞として認める。一方、中国語の「他動詞」の規定に関しては、趙（1979）に従い、原則として目的語をとる動詞とするが、「來（和訳：来る）」「去（和訳：行く）」のように、目的語をとるにもかかわらず「存在」「出現」「消失」の意味合いをもつものは自動詞と認める。

4. 調査対象と調査資料

本節の記述も基本的に麻（2016、2017）の規定に従ったものである。詳細はそちらを参照されたい。まず、調査対象であるが、日本語の場合は「絶望が俊也を苦しめる」のような「（ガ格の）主格名詞＋（ヲ格の）対格名詞＋他動詞」という文構造をもつ他動詞文とする。ただ、「重い病気が彼女を襲う」「奇跡が彼を信じさせる」など、名詞に連体修飾成分が付く場合や、動詞に有標のヴォイス形式が付くものは他動性に影響が出るため除く。また、「鎖鎌が勢いを増して廻る」のように、他動詞文が連用節に当たるものも調査対象から外す（連体節中の他動詞文は対象に含める）。中国語の場合は、「歲月（和訳：歲月が）＋改變（和訳：変える）＋我（和訳：私を）」のような「主格名詞＋他動詞＋対格名詞」という文構造をもつ他動詞文を調査対象とする。日本語と条件を合わせるために、名詞に連体修飾成分が付くものや、動詞に有標のヴォイス形式が付くものはすべて除く。

調査資料は、日本語・中国語ともそれぞれの大規模コーパスを用いる。日本語のコーパスは国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下BCCWJ）」³、中国語のコーパスは台湾の中央研究院の「現代漢語平衡語料庫（以下SINICA）」⁴を、それぞれ調査資料とする。本稿では、データ量を増やすことを目的に、日中両言語ともすべてのサブコーパスを対象に用例を収集する。用例の抽出にあたっては、BCCWJもSINICAも自作のPerlプログラムで行っ

た。

5. 理論の枠組み

5.1. 連語論的アプローチ

上述したように、本稿では、麻 (2016、2017) と同様、連語論的アプローチを用いる。言語学研究会 (1983) によれば、「連語」とは「従属的な結びつきに基づく、2つあるいは3つの単語の組み合わせ」をいう。本稿では、無生物主語他動詞文も特定の名詞と動詞との結びつきによって分類できると想定し、「主格名詞」⁵⁾「対格名詞」⁶⁾「動詞」の3つの単語の組み合わせの関係を考える。断っておきたいのは、本稿の研究対象は無生物主語他動詞文という「文」レベルのものだが、3節でも述べたように、調査対象とする「XガYヲZ」構文については、主語を主格名詞で示されたものに限定する措置をとったため、本稿に限って言えば、連語レベルでの主格名詞・対格名詞・動詞が実質上それぞれ文レベルでの主語・目的語・述語と1対1の対応関係をなす。したがって、「文」の研究に連語の枠組みを用いることに問題はないと考える。

ただ、言語学研究会は従属的な結びつきのみを連語と認め、主格名詞による結びつきは陳述的な結びつきとして連語論の対象と認めていない。これに対し、鈴木 (1983)、仁田 (1985)、宮島 (2005) は、主格名詞による結びつきは主語と述語という機能的な関係だけでなく、名付けのレベルでの関係をも担っているため、連語として扱うべき側面もあると述べている。宮島はさらに「馬がいなく／鳥がさえず／動物がなく」を主格名詞が動詞と結びつく連語の例として挙げ、主格名詞を連語論に入れる根拠を提示している。この立場を受け継いだ連語論の研究に森山 (1988) がある⁷⁾。本稿での連語論は、主格名詞による結びつきも連語として認めるこれらの立場に従う。ただし、動詞に対する分類は、言語学研究会の記述を一部参考にした。以上は日本語に関する説明であるが、中国語についても同様である。

5.2. 連語論の適用範囲

言語学研究会の連語論では、(12) (13)・(14) (15) のような「慣用的な言い回し」を対象としていないが、本稿でもこのような用例は除外する。

(12) 砂漠ではやはりまだ腕力が物を言うらしい。車の前の方に一人のアラブ青年が乗っていて、フランス語で私に話しかけた。(佐伯富『宮崎市定全集』)

(13) これでもう一日が終わるんだと思うと、不安が頭をもたげた。寝袋なんて持っていない。意外に冷えるかもしれないし、虫がいたらいやだ。(川端裕人『ニコチアナ』)

- (14) 他們若不是生來便口銜金湯匙（和訳：口が金のスプーンを咥える）的貴族、即是養尊處優、不愁吃穿的有錢人家。（佚名『世界名探介紹』）
- (15) 有人認為男人看辣妹熱舞是佔盡便宜、眼睛吃冰淇淋（和訳：目がアイスクリームを食べる）、其實不見得…（中時電子報「小熱褲辣遍中台灣」）

これらは、単語と単語の結びつきが自由でなく、非恣意的な面が強く、またその言語の文化による影響も大きいため、本稿ではこのようなものを別扱いし、まずは組み合わせが自由な結びつきから出発して、無生物主語他動詞文の成立要因を明らかにすることを試みる。

言語学研究会によれば、対格名詞と他動詞との自由な組み合わせには、「対象への働きかけ」「所有の結びつき」「心理的なかわり」の3類があるが、そのなかで最も基本となるのは「対象への働きかけ」である。これはさらに対格名詞によって「物に対する働きかけ」「人に対する働きかけ」「事に対する働きかけ」に分けられるが、2節で述べたように、「物に対する働きかけ」「事に対する働きかけ」に関してはすでに麻（2016、2017）で分析を行っているため、本稿では「人に対する働きかけ」に焦点を当てる。以下では、用語は麻（2016、2017）に従い、「人に対する働きかけ」の代わりに「対格名詞が人名詞の場合」で記述を行うことにする。次節より、本稿で扱う「主格名詞」「対格名詞」「動詞」のタイプについて説明する。

5.3. 主格名詞のタイプ

本稿では主格名詞を、物理的に実体を備えているかどうかによって、大きく「具体物」と「抽象物」の2類に分ける。「具体物」のなかには、「自然物」「機械」「道具」などに属するさまざまなものがあるが、用例が非常に少ないため、下位分類を設けないことにする。以下に「具体物」の定義と例文を示す。

- 具体物： 自然物、機械、道具のような具体的に空間を占めるもの
- 日本語例： ピアノが先生を呼ぶ（矢崎節夫『先生のピアノが歌った』）
- 中国語例： 電腦轉變人類（天下雜誌社「改變世界的十五大管理趨勢」）

一方、「抽象物」はさらに人間の活動によるものかどうかによって、「抽象的關係」と「人間活動」の2種類に分ける。「抽象的關係」とは、人間の活動そのものによるものではなく、現実の世界に存在する物事の内容や属性などに関するもので、「事柄」「作用」「時空」「様相」の4類に下位区分する。それらの定義と例文を以下に挙げる。

- 事柄： 事件、問題のような、現実起きた出来事を表わすもの
日本語例： 真実が人を傷つける（荒木源『骨ん中』）
中国語例： 性別認同問題困擾他（楊索『「變性」美女浩「劫」後』）
- 作用： 降雨、爆音のような、物理的に働きかける力をもつもの
日本語例： 爆音が魂を揺さぶる（ソニー・マガジズ『u v』）
中国語例： 神秘磁力吸引我（吳思鋒『寫履歷表』）
- 時空： 時代、距離のような、時間または空間によるもの
日本語例： 時代が人をつくる（内田健三『戦後宰相論』）
中国語例： 時代啓發他（朱邦復『東尼！東尼！（八）』）
- 様相： 秩序、地位のような、物事存在のありようを表わすもの
日本語例： 地位が人をつくる（竹内均『頭にやさしい雑学読本』）
中国語例： 美貌體制壓迫女性（台南女性月刊編集部「重塑女體—美容手術的兩難」）

「人間活動」とは、人間による精神や行為そのものを指し、以下のように、「心理活動」「生理活動」「具体行為」「経済活動」「言語文書」「思想学問」の6類に下位区分する。定義と例文は以下の通りである。

- 心理活動： 嫉妬、知覚、想像、思考のような、人間の感情・感覚・知的活動
日本語例： 怒りがひとを変える（中島義道『怒る技術』）
中国語例： 陰謀構陷男人（中時電子報「既愛女人又恨女人」）
- 生理活動： 呼吸、病気のような、人間の身体に起きるさまざまな現象
日本語例： 病氣がかれをつれさる（白井桂一『ジャン・ピアジェ』）
中国語例： 命運人（中時電子報「<多桑>蔡振南」）
- 具体行為： 攻撃、戦争のような、常に具体的な動作を伴う人間の行動
日本語例： 戦争が孤児を生む（赤川次郎『神隠し三人娘』）
中国語例： 教育教導學生（『中國時報』社會版）
- 経済活動： 貿易、投資、貧困のような、経済に関係する人間の行動
日本語例： 貧困が山科家を悩ます（千田稔『明治・大正・昭和華族事件録』）
中国語例： 金錢控制我（朱邦復『東尼！東尼！（廿八）』）
- 言語文書： 噂、小説、ドラマのような、言葉として表現されたもの
日本語例： 小説が小説家を動かす（朝日新聞社『一冊の本』）
中国語例： 書成全我們（王鼎鈞『讀書與看書之間』）

- 思想学問： 宗教、主義、政策のような、人間の知的活動による生産物
日本語例： 成果主義が貴方を滅ぼす（高橋浩子『ファンが増えるメルマガ』）
中国語例： 歴史哲學引導我們（王偉讚『<鴻—三代中國女人的故事>書評（2）』）

5.4. 対格名詞のタイプ

言語学研究会では、対格名詞を「物名詞」「人名詞」「事名詞」の3類に分けている。例を挙げると、それぞれ「鍵がドアを開ける」の「ドア」、「絶望が俊也を苦しめる」の「俊也」、「共産党が勢力を拡大する」の「勢力」である。ただ、5.1節でも説明したように、無生物主語他動詞文の構成要素には、主格名詞・対格名詞・動詞の3つがあるが、この3つの変数を同時に記述するのは困難であるため、筆者はこれまで変数の1つである対格名詞を物名詞と事名詞に固定し、この条件の下で主格名詞と動詞との2つの変数の関係を観察する方法で考察を行ってきた（詳細は麻（2016、2017）を参照されたい）。本稿では、対格名詞を人名詞に固定して、同様の検討を行う。

5.5. 動詞のタイプ

本稿で扱うのは人間に対する抽象的な動作⁸⁾を表わす動詞である。これは「心理変化」「生理変化」「行為変化」「空間変化」「社会変化」の5類に分けられる。定義と用例を以下に示す。この動詞に対する分類は、「行為変化」以外は言語学研究会の記述を参考にしたものである。

- 心理変化： 対象となる人に心理的な変化を起こす動詞
日本語例： 幼稚園受験が子供を苦しめる（三木裕子『愛情遮断症候群』）
中国語例： 物質満足你（朱邦復『巴西狂歡節（五）』）
- 生理変化： 対象となる人に生理的な変化を起こす動詞
日本語例： 飢えがわれわれを苦しめる（ファーブル『人に仕える動物』）
中国語例： 生態危機危害人類（若望保祿二世『新千年的開始（10）』）
- 行為変化： 対象となる人にある行為をするように喚起させる動詞
日本語例： 嫉妬心が人を動かす（斎藤茂太『「なぜか人に思われる人」の共通点』）
中国語例： 悲心鞭策他（宏印法師『從“空義”談中觀與唯識（3）』）
- 空間変化： 対象となる人に空間的な変化を起こす動詞
日本語例： 死が二人を分かつ（スーザン・フォックス『結婚と償いと』）
中国語例： 濤聲牽曳我（朱邦復『巴西狂歡節（三）』）
- 社会変化： 対象となる人に社会的な属性の変化を起こす動詞

日本語例： 家父長的凝視が女をモノ化する（スティーブン・カーン『視線』）

中国語例： 毛病造醫生（中時電子報「來去病院」）

5.6. 分析の方法

以上の分類基準に基づき、得られた用例を集計すると表1のような結果となる。主格名詞に関する分類項目のラベルは文字数が多く、後に散布図で示すときに見にくくなるため、「人間活動」の1番目の下位分類である「心理活動」を「N1」とするように、上位分類の頭文字と下位分類の順番で書かれた記号をラベルの先頭に加えておいた。

表1 無生物主語他動詞文の用例数

主格名詞 \ 動詞	心理変化		生理変化		行為変化		空間変化		社会変化		合計	
G 具体物	0	7	0	1	0	1	7	4	0	1	7	14
T1 抽象的關係(事柄)	2	4	0	2	0	0	0	0	0	0	2	6
T2 抽象的關係(作用)	1	5	0	0	0	0	0	1	0	0	1	6
T3 抽象的關係(時空)	1	4	1	0	0	0	4	3	9	0	15	7
T4 抽象的關係(様相)	0	2	0	0	0	0	0	1	3	1	3	4
N1 人間活動(心理活動)	9	1	7	1	4	2	1	0	0	0	21	4
N2 人間活動(生理活動)	0	0	0	0	0	1	6	0	0	0	6	1
N3 人間活動(具体行為)	5	5	3	3	4	3	3	0	4	1	19	12
N4 人間活動(経済活動)	4	2	0	0	1	1	0	0	0	0	5	3
N5 人間活動(言語文書)	5	10	0	0	1	0	0	0	0	1	6	11
N6 人間活動(思想学問)	8	7	0	0	3	1	0	0	1	2	12	10
合計	35	47	11	7	13	9	21	9	17	6	97	78

(各行左のマスが日本語、右のマスが中国語)

今回の調査で得られた用例の数は、日本語が97例、中国語が78例となっている。どちらも決して多いとは言えないが、これは対格名詞に名詞句階層の高い人名詞が来ることと関係すると思われる。全体の分布を概観すると、主格名詞の分類において、日本語では「N1 人間活動(心理活動)」、中国語では「G 具体物」の用例が最も多くを占めている。また、動詞の分類では、両言語とも「心理変化」が圧倒的に多いという共通の傾向が観察された。

すでに2節で述べたように、無生物主語他動詞文の成立に関する先行研究の問題点は、名詞か動詞かの一方しか見ないということであるが、本稿で採用した連語論的アプローチは、名詞と動詞を同時に取り扱うことが特徴的である。これに関連して、両者の相関を見る際にも名詞と動詞との両方向からの議論が必要だと思われる。以下では、主格名詞と動詞との結合傾向を

考察するために、動詞別と主格名詞別との2つの場合に分けて、それぞれ6・7節にて論じる。6節ではまず連語の軸となる動詞に注目し、無生物主語他動詞文を成立させる要因を抽出し、7節ではさらにそれらの要因と主格名詞との結合傾向を見る。

6. 動詞別に見る結合傾向

6.1. 日本語の場合

表1のクロス集計表だけでは主格名詞と動詞との結合傾向が観察しにくいいため、本稿ではコレスポネンス分析という統計手法を導入し、全体の結合傾向を探る。コレスポネンス分析は、多変量解析の一種で、フランスのBenzecriによって1960年代に提唱された質的データの解析方法である。その主な目的は、分析対象となる複数の変数をもつ情報を要約し、それらを

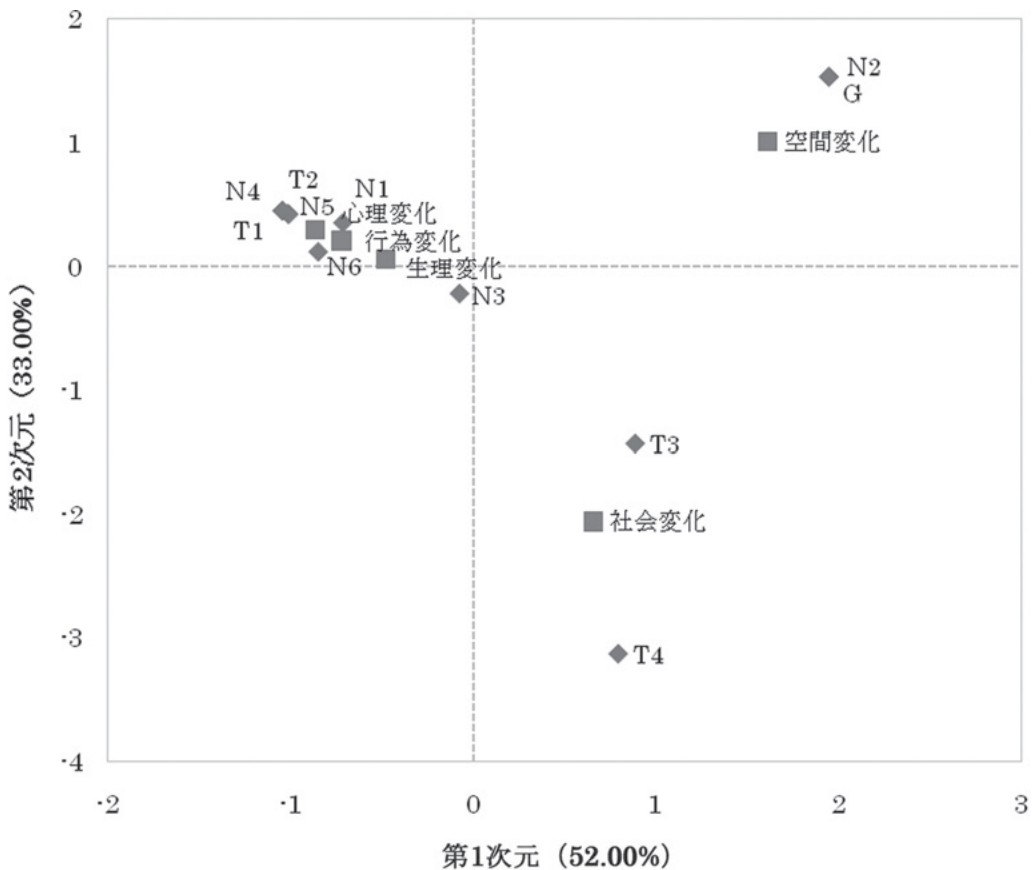


図1 日本語の散布図 (第1次元と第2次元)

2次元の散布図に表わすことで変数の特徴を明らかにすることである。

本稿でコレスポンデンス分析を行うために使用した統計ソフトウェアはR⁹⁾である。表1の日本語の部分に当たるデータをRのcorresp関数で解析した結果が図1の散布図である。なお、表1のデータの場合は、理論的に4つの次元の解を得ることができる¹⁰⁾が、第2次元までの累積寄与率が85.00%と、8割を超えているため、第2次元まで見ればおおよその傾向が分かるかと判断し、第3次元以降は検討しないことにする。

コレスポンデンス分析は、主成分分析などと異なり、パターンの分類が主な目的であるため、軸（次元）の解釈が難しい場合がある。しかし、今回のデータで得た散布図ではある程度の傾向が観察できたため、以下、軸（次元）の解釈を試みる。まず、動詞のタイプ（第1アイテム）の「心理変化」「生理変化」「行為変化」「空間変化」「社会変化」に注目して解釈したい。日本語の散布図において、横軸（以下第1次元）では「心理変化」「行為変化」「生理変化」はいずれも座標上の左側、負の方向に位置するのに対し、「空間変化」「社会変化」が右側の正の方向に位置する。この現象は、「心理変化」「行為変化」「生理変化」は何らかの性質がマイナスであり、その同じ何らかの性質が「空間変化」「社会変化」においてはプラスである、ということの意味している。「心理変化」「行為変化」「生理変化」は人間の意識または精神という内面的な側面の変化を描写する一方、「空間変化」「社会変化」は外面的な側面の変化が中心であるため、ここでは第1次元を「内面的」と「外面的」の違いを表わすと解釈し、両者を総称して「内面性」とする。

実際の用例を示しながら、この解釈の妥当性を検証してみる。図1を見れば、座標の左側に位置する名詞のタイプは、ほとんど(16)～(18)のように、「N2人間活動(生理活動)」以外の人間活動と、「T1抽象的關係(事柄)」「T2抽象的關係(作用)」であることが分かった。これらのタイプの名詞が「内面性」の高い変化をもたらす動詞と結合する割合を実際に計算すると、原点付近の「N3人間活動(具体行為)」が6割を占めていることを除いて、ほかのものはいずれも9割を上回っている。

- (16) 死を恐れなかった一向一揆も、最近のオウム事件も、宗教が人間を狂わす危険性のあることを示す典型的な例です（内田康夫『崇徳伝説殺人事件』）
- (17) これを「気狂いじみた考え」と呼んでいる。変革期に理念がひとを動かすおそろしさを、サトウは本当には知らなかったのであろう。（萩原延壽『外国交際』）
- (18) 今、空腹感が彼を苦しめていた。昨日は二日前に買っておいたコンビニのおにぎりを一個と牛乳を一杯だけしかのんでおらず…（青沼静也『チェーンレター』）

そして、座標の右側に位置する「N2人間活動（生理）」「G具体物」「T3抽象的關係（時空）」「T4抽象的關係（様相）」は、どれも「内面性」の高い変化をもたらす動詞と結びつきにくく、その割合はすべて1割程度を下回る数値になっている。以上のことから、第1次元は動詞が変化をもたらす「内面性」の度合いを表わし、その程度が強いほど軸の左側に位置することを確認することができた。

続いて、縦軸（以下第2次元）の解釈を試みる。この軸は、すべてのタイプの動詞を入れて解釈しても、有意味な結果が得られなかったため、まず右半分の「空間変化」と「社会変化」、つまり同じく外面的な変化を引き起こす側面をもつ動詞だけで解釈を試行する。ここでは「空間変化」が座標の上側、正の方向にあるのに対し、「社会変化」が下側の負の方向に位置するため、これは、「空間変化」は何らかの性質がプラスで、同じその何らかの性質が「社会変化」においてはマイナスであることを意味することになる。「空間変化」「社会変化」はどちらも外面的な変化を引き起こす面において共通点が見られるが、「空間変化」は物理的な存在位置の変化という具体的な面に重点を置いているのに対し、「社会変化」は社会的な位置の抽象的な変化と見なすことができる点において対照的である。これにより、第2次元は動詞の外面的変化が「具体的」か「抽象的」かの違いを表わし、これを「具体性」と解釈することができる。

実際の用例を挙げて、「具体性」という軸の解釈の妥当性を確認する。散布図の右上にある「N2人間活動（生理）」「G具体物」と結びつくのはすべて(19)のような「具体性」の高い「空間変化」の用例であるのに対し、右下にある「T3抽象的關係（時空）」「T4抽象的關係（様相）」が同タイプの動詞と結びつく割合は、それぞれ30.77%と0.00%とどちらも低い比率となっている。このことから、第2次元は動詞の外面的変化における「具体性」を表わし、その度合いが高いものほど軸の上に位置することが確認できた。

(19) 風邪には気をつけないと。いま、マルチビタミンを2種類飲んでおきました。ベッドが私を呼んでいる・・・・・・・・(Yahoo!ブログ)

6.2. 中国語の場合

本節では中国語の無生物主語他動詞文における主格名詞と動詞との結合傾向を考察する。日本語の場合と同様、表1のクロス表ではそれが観察しにくいいため、コレスポネン分析を適用する。中国語のデータを、同じくRのcorresp関数で解析した結果が図2の散布図である。

日本語と同じく、まずは累積寄与率の数値を確認しておく。図2を見ると、第2次元までの累積寄与率が74.60%であることが分かる。つまり、第2次元まで見れば8割に近いデータを説明できることになるため、第3次元以降は検討しないことにする。

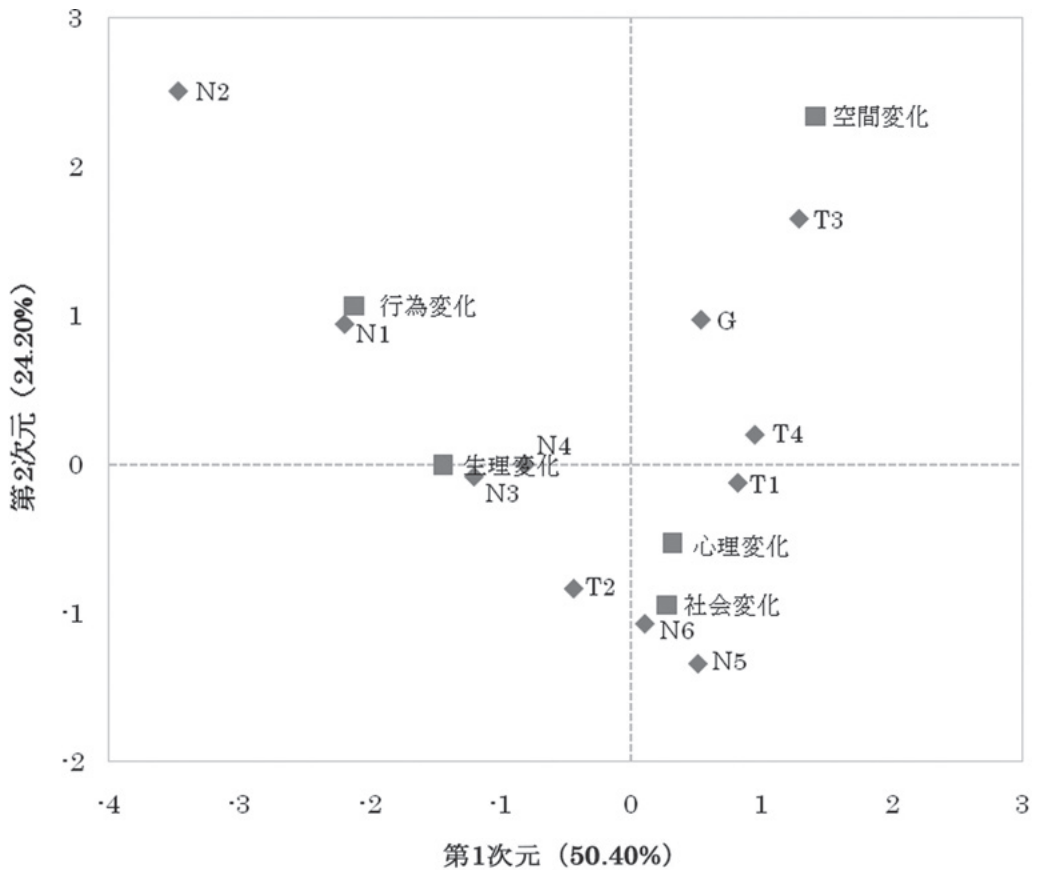


図2 中国語の散布図 (第1次元と第2次元)

図2の中国語の散布図は、「心理変化」の動詞が右下にずれている点を除き、ほかの動詞の相対的な位置は日本語とそれほど変わらない。しかし、「心理変化」の場所が変わることによって、軸（次元）の意味は日本語のように明快に解釈することが難しくなっている。ここではあえて軸への意味付けをしないが、「心理変化」についてもう少し考えてみたい。表1の実数のデータを見ると、「心理変化」は量的に日中両言語とも大きな勢力をもっているが、日本語の場合はほかの動詞もある程度使われているのに対し、中国語の場合は「心理変化」への集中がより強く観察される。また、それと結びつく主格名詞に関して、日本語では「人間活動」の名詞が中心であるのに対し、中国語では相対的に「抽象的關係」の名詞が中心になっている。つまり、日本語は「人間活動」を主格名詞に、「心理変化」だけでなくほかの動詞をも述語とすることが多い一方、中国語は「抽象的關係」を主格名詞に、主に「心理変化」を述語とすることが多いという、比較的明確な違いが見て取れる。

以下では、具体的な用例を示しながら、両軸を詳しく検討する。第1次元に関して、まず、左側にある「N2 人間活動（生理活動）」「N1 人間活動（心理活動）」「N3 人間活動（具体行為）」「N4 人間活動（経済活動）」は、(20) (21) のように、ほとんど「行為変化」と「生理変化」の動詞と結びついている。実際の用例数をもとに計算すると、それらの割合はいずれも9割以上を占めていることが分かった。

- (20) 釣魚樂會影響另一半 (和訳：釣りの楽しさがパートナーに影響する), 許多夫妻。情侶培養感情常選擇較靜態的釣魚活動… (『自由時報』旅遊版)
- (21) 轎夫聽喊聲轉頭一看、驚呼道：新娘子昏過去了。喊聲驚醒了月牙兒 (和訳：叫び声が月牙ちゃんを驚かす)、她爬出花轎… (盧勁松『Where are you ?沙月魂』)

次に、第1次元の右側を見ると、右下のほうに固まっている「N6 人間活動（思想学問）」「N5 人間活動（言語文書）」「T1 抽象的關係（事柄）」は「心理変化」と結びつきやすい現象が見られ、その割合はどれも8割以上である。この「心理変化」は日本語の散布図では左上に位置するが、中国語では右下のほうにあるという点において両言語で対照的である。これは、すでに述べたように、中国語の一部の主格名詞が「心理変化」の動詞との結びつきが圧倒的に多いといった日中の違いによる現象だと思われる。なお、右上の「T3 抽象的關係（時空）」「G 具体物」「T4 抽象的關係（様相）」は「空間変化」と結びつきやすく、日本語と一部類似した布置が見られた。

続いて、第2次元についても実例を用いて検討してみる。この次元では、座標の右側が「具体的」か「抽象的」かによって分かれており、日本語と同じ傾向を見せている。もっとも、中国語の「心理変化」の位置が日本語と異なるが、「心理変化」も抽象的变化のほうに属するため、第2次元を「具体性」と解釈して問題はないと思われる。実際の用例を見ると、右上の「T3 抽象的關係（時空）」「G 具体物」「T4 抽象的關係（様相）」が(22) (23) のように、具体的な場所の変化を示す「空間変化」との結びつきが多く、その比率は「T3 抽象的關係（時空）」が100.00%と最も多く、次に「G 具体物」「T4 抽象的關係（様相）」がそれぞれ80.00%と50.00%である。一方、右下の「N6 人間活動（思想学問）」「N5 人間活動（言語文書）」は用例数が少なく、確固たることは言えないが、比率上は0.00%と、具体的な場所の変化を示す動詞とは無縁のものになっている。以上検討してきたように、中国語の第2次元は「具体性」の程度を表わし、その度合いが高いものほど軸の上方にプロットされることが分かった。

- (22) 但公共設施等未配合、新市鎮吸引人口 (和訳：新都市が人口を吸引する) 的計劃往

往失敗、國土也不斷被糟蹋。(光華雜誌社「都市的誕生與成長」)

- (23) 在臺灣、你也許未見過真正的美景吧！請容山野帶你走一遭 (和訳：山野があなたを連れ回る)、你將發現山野之美一切盡在不言中。(中山大學『山野社簡介』)

以上の解釈の結果は、「心理変化」の動詞が両言語における無生物主語他動詞文の違いをもたらす最も大きな要因であることを示唆している。その理由は、日本語よりも中国語のほうが一部の主格名詞が「心理変化」との結びつきが集中的であることにありとされる。なお、「心理変化」以外の動詞については両言語において類似した傾向が見られる。

7. 主格名詞別に見る結合傾向

前節では動詞のタイプ (第1 アイテム) を中心に論じてきたが、本節では視点を変えて、主格名詞のタイプ (第2 アイテム) ごとに、それと結びつく動詞との傾向を見る。主格名詞のタイプに関する分類項目が詳細にわたり、すべてを列挙する紙幅がないため、本節ではその上位分類である「具体物」「抽象的關係」「人間活動」の項目ごとに述べていく。

7.1. 具体物によるもの

まずは、具体物によるものを見よう。日本語の場合では、図1の散布図を観察すると、(24) (25) のように、「空間変化」タイプの動詞と結びつきやすいことが分かる。そして、中国語の場合でも、図2に示されたように、同じく (26) (27) のような「空間変化」タイプの動詞と結びつく傾向がある。

- (24) 人通りのない場所でも手入れの行き届いた花壇があると、いつ人が来るか分からないからです。花が人を呼ぶのです。(愛知県愛知郡東郷町『広報とうごう』)
- (25) 「林道がオレを呼んでいるぜ！！こんな看板、MTBにはカンケーないもんネー」と気軽に考えていないだろうか。(大竹雅一『韋駄天MTBオフロード・ライディング』)
- (26) 獨自走到沙灘上。海風包圍著我，濤聲牽曳著我 (和訳：波の音が私を牽引する)、回憶便成了難以逃避的避難所。(朱邦復『巴西狂歡節 (三)』)
- (27) 其奇特景緻吸引數千名民衆 (和訳：不思議な景色が数千名の民衆を惹きつける) 到場觀賞，現場擠得水洩不通。(『中國時報』生活版)

つまり、このタイプの名詞に関しては、両言語においてはどちらも人間の外面的、かつ具体

的な「空間変化」の動詞と結合する傾向が見られる。

7.2. 抽象的關係によるもの

抽象的關係によるものに関しては、両言語の散布図を見ると、おおよそ「T1抽象的關係（事柄）」「T2抽象的關係（作用）」と「T3抽象的關係（時空）」「T4抽象的關係（様相）」との2つのグループに分けて考えることができる。まず、前者の「T1抽象的關係（事柄）」「T2抽象的關係（作用）」について述べる。この2タイプの名詞は、日本語も中国語も（28）～（31）のように、「心理変化」の動詞と結びつくことが多い。

- (28) そしてこれこそが、川戸の言った「真実が人を傷つける」ということの本当の意味なのかもしれない。（荒木源『骨ん中』）
- (29) 高い理想に向けて試行錯誤を繰り返したからこそ実現したものだ。爆音が魂を揺さぶり、誰もの今に置き換えられる言葉が…（ソニー・マガジズ『u v』）
- (30) 咪咪騒動不安、不斷自問：「我究竟是誰？是男是女？」性別認同問題不斷困擾著他（和訳：性自認の問題が彼を悩ます）。（楊索『「變性」美女浩「劫」後』）
- (31) 暗示力量影響對方（和訳：暗示の力が相手に影響する）。語言的功用、乃是通過明言和暗示來影響和控制對方。（摩登原始人『「閏八月」後的兩岸關係』）

しかし、もう1つのグループの「T3抽象的關係（時空）」「T4抽象的關係（様相）」については少し異なる傾向が見られた。日本語の場合は、この2タイプの名詞は（32）（33）のように「社会変化」の動詞と結合しやすいのに対し、中国語の場合には、（34）（35）のような「空間変化」と、（36）（37）のような「心理変化」の2つのタイプの動詞と結びつく傾向を見せた。これは前節に述べた、中国語の「心理変化」の動詞が散布図において日本語と異なる布置になっている現象と関わっている。

- (32) つまりは貧乏な環境が、必要だった。環境が天才モーツァルトを創ったのである。天才は生まれながらのもので…（五味康祐『ベートーヴェンと蓄音機』）
- (33) どんな人でも社長になると、社長らしくなるのはどうして？ ビジネスマンの世界では地位が人をつくるとよくいわれます。（竹内均『頭にやさしい雑学読本』）
- (34) 朱鎔基進一步説，土地集中了中國大陸幾億農民（和訳：土地が中国大陸何億もの農民を集める）、如果不能集中…（中時電子報「朱鎔基：積極發展非國有制農村企業」）
- (35) 晦澀詩風嚇跑讀者（和訳：難しい詩風が読者を追い出す）。詩的有聲傳統既然源遠

流長、為何後來新詩又變成「無聲」呢？（李珊『詩人現聲—喚醒遺落的詩情』）

- (36) 王傑已捨棄一身皮衣皮褲的浪子扮相、他說：「歲月改變了我（和訳：歲月が私を変えた。）」回想十多年以來…（李筱雯『五億少爺陽帆 只剩回憶和失意』）
- (37) 柏恩（William Bohm）認為這種新詩風啓發了未來派（和訳：新しい詩風が未来派を啓発する）所謂「無線電式想像」…（中時電子報「焦桐」）

まとめると、抽象的關係によるものは、「T1 抽象的關係（事柄）」「T2 抽象的關係（作用）」では日中において同じ傾向が見られたが、「T3 抽象的關係（時空）」「T4 抽象的關係（様相）」では異なる結びつきの傾向が確認された。後者の違いは両言語における「心理変化」の動詞の異なる結合傾向によるものと思われる。

7.3. 人間活動によるもの

人間活動によるものに関して、日本語では、「N2人間活動（生理活動）」が（38）（39）のように「空間変化」の動詞と結びつく以外、ほかの人間活動によるものはすべて（40）～（45）のように、「心理変化」「行為変化」「生理変化」といった人間の内面的な変化を引き起こす動詞と結びつく。

- (38) ピアジェは、病気がかれをつれさるまさに直前に本書の完成をみて、大いに喜んだものである。（白井桂一『ジャン・ピアジェ』）
- (39) …病めるときも、すこやかなるときも…死が二人を分かつまで…「はい」お母さんと、お父さんがいました。（ジュディ・デルトン『エンジェルとお母さんの結婚』）
- (40) ただし、その見きわめができないと、向上心が自分を苦しめることになる。歌手のマイケル・ジャクソン氏は…（斎藤茂太『「うつ」から元気になれる本』）
- (41) しかし科学（自然科学）が人を傷つけることがおこるたびに、両刃の剣のことが気になって仕方がなかった（岩波洋造『自然のかくし絵』）
- (42) 適当に煙草を一つ買い、圭一は来た道を走った。胸騒ぎが圭一を急き立てる。途中、どこかの飼い犬が驚いて吠えた。（小杉健治『父からの手紙』）
- (43) 信念＝無限の好奇心をもち、絶えず夢を抱いている。またデザイン価値が人を動かすことを信じている。（山村貴敬『デザインマネジメント』）
- (44) 薄暗い明かりがバスの窓に映えたとき、疲労が彼を圧倒した。体をまるめると、嵐が体から吹き抜けていった。（アハロン・アッベルフェルド『不死身のバートフス』）
- (45) 狩りの獲物にする動物はきわめて豊富なのに、絶え間なく飢えがわれわれを苦しめ

るし、狩猟動物は貴重な生活手段になる…（ファーブル『人に仕える動物』）

その一方、中国語では、人間活動によるものはその結合傾向によって、大きく2つのグループに分けることができる。1つは「N1人間活動（心理活動）」「N2人間活動（生理活動）」「N3人間活動（具体行為）」「N4人間活動（経済活動）」で、もう1つは「N5人間活動（言語文書）」「N6人間活動（思想学問）」である。前者は人間の感情や知性、またはそれらによって喚起された行為を示す名詞で、主に（46）～（49）のように、「行為変化」「生理変化」の動詞と結びつきを成している。後者は人間の知性による生産物を示す名詞で、こちらは（50）～（53）のように「心理変化」「社会変化」の動詞と結びつきやすい傾向がある。

- (46) 菩薩是有辦法證無生，但是不敢證、因為悲心鞭策著他（和訳：悲心が彼を鞭撻する）要在這個世界裡廣度眾生…（宏印法師『從“空義”談中觀與唯識（3）』）
- (47) 應再加強注意清潔、希望清潔操運動能帶動小朋友自動學習（和訳：清潔体操が子供を自主学習させる）並養成衛生習慣。（『中時電子報』生活版）
- (48) 轎夫聽喊聲轉頭一看、驚呼道：新娘子昏過去了。喊聲驚醒了月牙兒（和訳：叫び声が月牙ちゃんを驚かす）、她爬出花轎…（盧勁松『Where are you ?沙月魂』）
- (49) 而石強—眼光卻洩露心事、眷戀地看向客房那一扇門。沒有聲音喚醒她（和訳：声が彼女を起こす）。她還是很累…（席絹『使你為我迷醉』）
- (50) 歌詞的內容並不是最重要的藝術工具，聽眾心中的領受能力才是決定作品能否感動人（和訳：作品が人を感動させる）的要件。（『中國時報』藝術版）
- (51) 更何況，伊斯蘭真正感動人心（和訳：イスラム教が人を感動させる）的力量蘊藏在古蘭經裡…（光華雜誌社「清真溪流——古蘭經的新知音」）
- (52) 電影製造了明星（和訳：映画がスーパースターを作る）、明星也延續了電影的壽命、而且也增加了電影的票房。（中國電視公司『談電影話明星』）
- (53) 有人說、平均主義出懶漢（和訳：平均主義が怠け者を作る）、過去二十二年出了多少懶漢？（丁抒『人禍』）

このタイプの名詞の結合傾向を改めて整理すると、日本語では人間の内面的な面を変化させる動詞との結びつきが多い一方、中国語では人間の内面的な変化を引き起こす動詞に加え、「社会変化」のような外面的な抽象変化をもたらす動詞とも結びつくことが多いと言える。

8. まとめ

本稿の結論をまとめると以下ようになる。まず、対格名詞を人名詞に限定した場合、無生物主語他動詞文の成立において、動詞の「内面性」は主に日本語、そして動詞の「具体性」は日中両言語の共通の要因として働いているということが言える。これに関連して、各タイプの名詞と結びつきやすい動詞の種類は、その名詞の性質と深く関わっていることも分かった。例えば、日中の共通点として、「具体物」タイプの名詞は「ベッドが私を呼ぶ」のように、比較的外面的な属性をもつ「空間変化」の動詞による結びつきに集中していることが挙げられる。そして両言語の最も大きな相違点は、「心理変化」の動詞との結びつきにあるが、具体的に言うと、このタイプの動詞は日本語では「人間活動」を主格名詞に、「心理変化」だけでなくほかの動詞をも述語とするのに対し、中国語では「抽象的關係」を主格名詞に、主に「心理変化」を述語とする。ただ、内面的な変化を引き起こす名詞の勢力は日本語よりも中国語のほうが相対的に大きいことも散布図を通して観察された。この現象は、Silverstein (1976) の名詞句階層では同じタイプの名詞にも関わらず、日本語と中国語ではそれぞれがもつ影響力が異なる可能性があることを示唆している。これは、対格名詞が事名詞の場合 (麻2017) でも観察された共通の現象である。

本稿は、筆者がこれまで行った対格名詞が物名詞と事名詞の調査に続き、連語論的アプローチとコレスポネンス分析を方法論として用いた第3の考察である。以下は、一連の考察の全体的な概要をまとめる。これまでの調査では、対格名詞を物名詞に限定した場合は述語の「再帰性」と「受影性」、事名詞に限定した場合は述語の「再帰性」が両言語の共通の要因として挙げられた。それに加えて、今回の人名詞の調査で新たに分かったのは「具体性」という要因である。これらの結論の間には、一見整合性がないように見えるが、よく考えれば以下のように一貫性が見られるところもある。まず、無生物主語他動詞文は主格名詞が無生物名詞であり、理論的に対格名詞の人名詞と再帰的表現を作りようがないため、人名詞の考察において再帰性が存在しないのは道理にかなう。加えて、物名詞の考察で挙げられた受影性は具体的な働きかけ特有の概念で、事名詞・人名詞が対格名詞の抽象的な描写に現れないのも論理的に説明がつく。しかし、上述したように、対格名詞が事名詞と人名詞の場合では、内面的な変化を引き起こす名詞の勢力は日本語より中国語のほうが大きいという現象がある。つまり、具体的な描写の受影性と同じく、抽象的な描写においても述語の影響力の強さが要因として働いている可能性がある。以上のことから、再帰的表現であるかどうかの日中の違いをもたらす最大の要因であり、述語が表わす影響力の強さがそれに次ぐ重要な要因であることがうかがえる。

ただし、これはあくまでも軸の解釈から得た見通しで、無生物主語他動詞文成立の全貌を見

するためには、対格名詞が「物名詞・事名詞・人名詞」の具体的な用例を合わせて総合的に検討する必要がある。また、今回の調査では主に文レベルの要因に焦点を当てたため、前後のコンテキストという文章レベルの環境に関しては考慮に入れなかった。これらの点は今後の課題としたい。

注

- 1) 熊(2014)でも述べられているように、無生物主語他動詞文の成立には文レベルのほかに、文章レベルの要因も存在するが、本稿では文レベルの要因のほうに焦点を当てる。文章レベルの要因に関しては今後の課題にする。
- 2) 「無生物」ではなく「非情物」という用語を用いるべきだと主張した研究もある(かねこ1990)が、本稿では熊(2009)に従い、日中を比較する際により一般性が高い「無生物」を用いる。
- 3) 本研究で用いた「現代日本語書き言葉均衡コーパス」は、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座が国立国語研究所と交わした利用許諾契約に基づき使用したものである。
- 4) 本研究で用いた「現代漢語平衡語料庫」は、筆者が個人的に台湾の中央研究院と交わした利用許諾契約に基づき使用したものである。
- 5) 言語学研究会の用語で言うならば、ここではもともと「ガ格名詞」と称すべきだが、本稿では中国語も一緒に扱うため、便宜上「主格名詞」という呼び方に統一した。
- 6) 注5)と同様で、もともと「ヲ格名詞」と称すべきだが、本稿では「対格名詞」に統一した。
- 7) 森山の出发点は格のパターンごとの連語論的な意味を網羅的に分析することであり、同じ連語論的アプローチとはいえ、言語学研究会とは異なる目的である。しかし、「連語論的な意味＝構造的に縛られた意味」という中核的な概念はどちらも同じである。
- 8) ここでいう「抽象的」とは、物理的な働きかけを与えることのできる具体的な動作でないものを指す(言語学研究会1983)。対格名詞が人名詞の場合はすべて、或いは自動的に抽象的な動作になるわけではない。例えば、「洪水が人々を押し流す」は抽象的な動作ではない。
- 9) インターネットで公開されたフリー統計解析ソフトウェアである。
- 10) 解の次元数は、行数と列数の小さいほうから1を引いた数になる。ここでは主格名詞が11タイプで、動詞が5タイプであるため、得られる次元数は4になる。

参考文献

- 奥津敬一郎(1967)「自動化・他動化および両極化転形一自・他動詞の対応一」『国語学』第70集。
 かねこ・ひさかず(1990)「非情物主語の問題から」『国文学解釈と鑑賞』第55巻第7号。
 言語学研究会(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房。
 国立国語研究所(2004)『分類語彙表(増補改訂版)』大日本図書。
 鈴木康之(1983)「連語とはなにか」『教育国語』第73号。
 趙元任(1979)『漢語口語語法』商務印書館。
 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版。
 仁田義雄(1985)「言語学研究会編『日本語文法・連語論(資料編)』を読んで」『国語学』第140集。
 麻子軒(2016)「連語論的アプローチによる無生物主語他動詞文の日中対照—コレスポネンデンス分析による成立

要因の検討—『計量国語学』第30巻第7号。

—— (2017) 「連語論的アプローチによる無生物主語他動詞文の日中対照—対格名詞が事名詞である場合—」
『阪大日本語研究』第29号。

宮島達夫 (2005) 「連語論の位置づけ」『国文学解釈と鑑賞』第70巻第7号。

森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院。

熊鷹 (2009) 『鍵がドアをあけた』笠間書院。

—— (2014) 「日本語無生物主語他動詞文の許容に影響を与える要因とその関係」『学習院大学大学院日本語日
本文学』第10号。

Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, Robert. M. W. (ed.)
Grammatical Categories in Australian Languages. Canberra: Australian Institute of Aboriginal
Studies.

用例出典 (文中に引用したもののみ示す)

【現代日本語書き言葉均衡コーパスDVD版 Version 1.1】愛知県愛知郡東郷町 (2008) 『広報とうごう』2008年
09号/青沼静也 (2001) 『チェーンレター』角川書店/赤川次郎 (2005) 『神隠し三人娘』集英社/朝日新聞社
(2001) 『一冊の本』2001年3月号/アハロン・アッベルフェルド (1996) 『不死身のバートフス』みすず書房/
荒木源 (2003) 『骨ん中』小学館/岩波洋造 (1995) 『自然のかくし絵』海鳴社/内田健三 (1994) 『戦後宰相
論』文芸春秋/内田康夫 (1997) 『崇徳伝説殺人事件』角川春樹事務所/大竹雅一 (1992) 『草駟天 MTB オフ
ロード・ライディング』山と溪谷社/川端裕人 (2001) 『ニコチアナ』文芸春秋/小杉健治 (2003) 『父からの
手紙』日本放送出版協会/五味康祐 (1997) 『ベートーヴェンと蓄音機』角川春樹事務所/斎藤茂太 (2004) 『「
うつ」から元気になる本』ぶんか社/斎藤茂太 (2005) 『「なぜか人に思われる人」の共通点』新講社/佐伯
富 (1992) 『宮崎市定全集』岩波書店/白井桂一 (2004) 『ジャン・ピアジェ』西田書店/ジュディ・デルトン
(2003) 『エンジェルとお母さんの結婚』朔北社/スーザン・フォックス (2004) 『結婚と償いと』ハーレクイン
/スティーブン・カーン (2000) 『視線』研究社出版/千田稔 (2002) 『明治・大正・昭和華族事件録』新人物
往来社/ソニー・マガジズ (2005) 『u v』2005年2月号/高橋浩子 (2003) 『ファンが増えるメルマガ』明
日香出版社/竹内均 (1991) 『頭にやさしい雑学読本』同文書院/中島義道 (2003) 『怒る技術』PHP研究所/
中津彦彦 (2002) 『塙保己一推理帖』光文社/二条睦 (2000) 『監獄女医』角川春樹事務所/萩原延壽 (1999)
『外国交際』朝日新聞社/ファーブル (2004) 『人に仕える動物』岩波書店/三木裕子 (2001) 『愛情遮断症候群』
角川書店/矢崎節夫 (1996) 『先生のピアノが歌った』ポプラ社/Yahoo! ブログ (2008) 『練習用』/山崎玲子
(2002) 『もうひとつのピアノ』国土社/山村貴敬 (2001) 『デザインマネジメント』織研新聞社

【中央研究院平衡語料庫DVD版 Version 3.0】丁抒 (1997) 『人禍』九十年代雜誌社/中山大學 (1994) 『山野社
簡介』中山大學山野社/中時電子報/中國時報/中國電視公司 (1993) 『談電影話明星』中國電視公司/天下雜
誌社 (1995) 「改變世界的十五大管理趨勢」『天下雜誌』天下雜誌/王偉讚 (1999) 『<鴻—三代中國女人的故事
>書評 (2)』國立公共資訊圖書館/王鼎鈞 (1995) 『讀書與看書之間』光華雜誌/台南女性月刊編輯部 (1998)
「重塑女體—美容手術の兩難」『台南女性月刊』台南市婦女會/光華雜誌社 (1995) 「都市的誕生與成長」『光華
雜誌』光華雜誌/光華雜誌社 (1999) 「清真溪流—古蘭經的新知音」『光華雜誌』光華雜誌/朱邦復 (1994)
『巴西狂歡節 (三)』時報/朱邦復 (1994) 『巴西狂歡節 (五)』時報/朱邦復 (1994) 『東尼! 東尼! (八)』時
報/朱邦復 (1994) 『東尼! 東尼! (廿八)』時報/自由時報/吳思鋒 (2003) 『寫履歷表』聯合文學/宏印法
師 (1988) 『從“空義”談中觀與唯識 (3)』BBS/李珊 (1995) 『詩人現聲—喚醒遺落的詩情』光華雜誌/李筱雯

(2003)『五億少爺陽帆 只剩回憶和失意』星報／若望保祿二世 (2001)『新千年的開始 (10)』天主教台灣主教團
／席絹 (1999)『使你為我迷醉』万盛／楊索 (2001)『「變性」美女浩「劫」後』中國時報／摩登原始人 (1995)
『「閏八月」後的兩岸關係』天下雜誌／盧勁松 (1995)『Where are you? 沙月魂』光華雜誌

(外国人招聘研究員)

(2017年8月15日受付)

(2017年9月22日掲載決定)